2022 年度 研究旅行奨励制度 報告書

対馬における日韓交流の礎と実態を探る
―朝鮮通信使を中心として―

23AR087 前田桃花

目次

はじめに
1. 研究の目的
2. 期待される研究の成果
3. 調査日程
第 1 章 対馬の地理的条件
1. 対馬と韓国の距離（現地調査）
— 韓国展望所
2. 対馬の土地の特徴
3. 対馬とサツマイモ
— 伝統料理「ろくべえ」（現地調査）
第 2 章 対馬における朝鮮通信使の歴史
1. 朝鮮通信使とは
2. 対馬と朝鮮通信使
3. 朝鮮通信使関連史跡（現地調査）
— 万松院
— 長寿院 雨森芳洲墓所
— 国分寺 山門
— 金石城跡・旧金石城庭園
— 桟原城跡
— 漂民屋跡
— 対馬博物館
第 3 章 現代に受け継がれる朝鮮通信使
1. 朝鮮通信使の継承（現地調査）
— 対馬朝鮮通信使歴史館
— 朝鮮通信使行列振興会
— 長崎県対馬歴史研究センター
2. 対馬市の取り組み（現地調査）
— 対馬市役所
— 朝鮮通信使関連商品の制作
— 対馬のこれから
おわりに
参考文献

はじめに

1. 研究の目的

古代より行われていた日韓の交易だが、豊臣秀吉による朝鮮侵略後、日本は朝鮮との国交を断絶する。江戸時代になり、朝鮮との国交回復をはかるべく日本側から韓国側に派遣を打診し始まったのが朝鮮通信使である。1607 年から 1811 年までの約 200 年の間で 12 回に亘って来日し、主に日本の将軍襲職祝賀や文化交流を行うなど日本と朝鮮の友好関係の維持を担い、対馬藩は江戸幕府と朝鮮王朝の仲立ちとなっていた。朝鮮通信使を通して朝鮮から日本へ絵画や書、医学などが伝わった中で、日本から朝鮮に持ち帰られ現在にも残っているものがあることに興味を持った。1764 年に来日した朝鮮通信使の正使趙厳が持ち帰った「サツマイモ」はその一つで、「고구마（読み：コグマ、意味：サツマイモ)」という韓国語は対馬の「孝行芋」が訛って呼ばれるようになったとされている。これらのことから、対馬における朝鮮通信使の歴史や日朝文化交流の証と言えるサツマイモについて卒業論文の執筆を行う中で、現地調査する必要を感じたため研究旅行を行う。

現地では市役所や歴史館、歴史的史跡を訪れ、対馬における朝鮮通信使の歴史や普及活動について資料調査とインタビュー調査を行う。また雨森芳洲が『交隣提醒』の中で説いた国際関係間での文化の相互理解や誠信の交わりが江戸時代から続く日韓交流の継承にどのように関わっているかについて捉える。

2. 期待される研究の成果

①朝鮮通信使に精通した専門家へのインタビューを通して、本だけでは成し得ない、より正確な研究が進められる。
②朝鮮通信使行列についてインタビューを行うことで、江戸時代から続く日韓交流の実態を確認できる。
③現地・対馬でのみ見ることができる、対馬藩藩主である宗家が残した古文書などの実物を調査することで、現代に知られていない朝鮮通信使の歴史的意義を確認できる。
④歴史的史跡を訪れ、歴史を実際に体験できる。

3. 調査日程

出発予定日　2022 年　8 月　6 日 帰着予定日　2022 年　8 月　11 日		旅行予定日数（発着日を含む） 6 日間
	滞 在 地	行動
第１日目 8/6(土)	福岡→対馬	万松院 国分寺 長寿院 雨森芳洲墓所 桟原城跡 漂民屋跡
第２日目 8/7(日)	対馬	対馬博物館 対馬朝鮮通信使歴史館 金石城跡・旧金石城庭園
第３日目 8/8(月)	対馬	長崎県対馬歴史研究センター 日本観光物産館 観光情報ふれあい処つしま
第４日目 8/9(火)	対馬	対馬市役所 朝鮮通信使行列振興会
第５日目 8/10(水)	対馬	韓国展望所
第６日目 8/11(木)	対馬→福岡	資料整理

第 1 章 対馬の地理的条件

第 1 章では、対馬におけるサツマイモの伝播や朝鮮への影響を探るために、「国境の島」と呼ばれる対馬について韓国との距離や土地の特徴を明らかにした上で、対馬でサツマイモを取り入れるに至った経緯や朝鮮への伝播について示す。

1. 対馬と韓国の距離（現地調査）

韓国展望所

韓国展望所のある鰐浦地区は対馬の最北端に位置しており、厳原から片道約 2 時間バスに乗ると到着する。韓国までは約 49.5 キロメートルの距離である[1]。韓国展望所を訪れた日には、うっすらではあるが釜山の影を確認することができた（図 1）。

約 1 万年前の氷河期、対馬は大陸と繋がっていて、氷河期後に島になったとされている。対馬は大陸への玄関口であり、朝鮮通信使来日の際には最初の寄港地として対馬に訪れ、本土へと渡航していた。1703(元禄 16)年には、国家使節である訳官使[2]108 名と対馬藩士 4 名が鰐浦を目前にして遭難し、命を落とすという事故があった。「宗家文庫史料」の中には「渡海譯官並従者姓名」という墨書小冊子が発見されていて、現在は韓国展望所近くの丘に 112 個の霊石を用いて碑を建立（1999 年）、また「朝鮮國譯官並従者殉難霊位」を刻し（2003 年）追悼している（図 2）。

図 1 韓国展望所からの景色（撮影：筆者）

図 2 訳官使遭難追悼碑（撮影：筆者）

2. 対馬の土地の特徴

『魏志倭人伝』『海東諸国紀』に記された対馬

3 世紀頃書かれた『魏志倭人伝』（『三国志』「魏書」第 29・30）には対馬が初めて歴史書に登場する。対馬の土地の説明として「土地は山険しく、深林多く、[……]良田なく、海物を食して自活し、船に乗りて南北に市糴す」とあり、山は深く、水田が少ない土地であったこと、島民は海産物を食べて生活し、朝鮮半島や日本本土と交易を行っていたことが分かる。

また、『海東諸国紀』にも対馬の記述がある。『海東諸国紀』は朝鮮の領議政申叔舟が

---

[1] 韓国展望所看板参照

[2] 朝鮮側から対馬府中まで来て、役人と交渉する。江戸時代を通して 51 回渡海した。

文明 3(1471)年に朝鮮王成宗の命に従い撰進した書物である。海東諸国とは日本の本州・四国・九州・壱岐・対馬・琉球国を指し、海東諸国総図・日本本国図・日本国西海道九州図・日本国一岐島図・日本国対馬島図・琉球国図、日本国紀・琉球国紀・朝聘応接紀からなり、追加付録として朝鮮三浦の地図や畠山殿副官人良心曹饋餉日呈書契、琉球国情に関する聞書がある。『海東諸国紀』の「対馬島」には「四面は皆山石にして[……]民貧しく、煮塩・捕魚・販売をもって生となす」と記されており、土地は痩せ、民は貧しい生活を送っていたことが分かる[3]。『魏志倭人伝』から『海東諸国紀』まで 1000 年程経過しても大きな変化は見られず、共通して①対馬の土地が痩せていること②民は貧しい生活を送っていたことが記されている。

3. 対馬とサツマイモ

サツマイモの伝播

対馬は島面積の 89%が森林で、水田に適した平地が少なく、土地も不毛である。対馬は米穀生産が乏しく、食糧獲得は困難であった。対馬でサツマイモ（甘藷）が広く栽培されるようになったのは 1715 (正徳 5)年以後で、甘藷の効用にいち早く着目したのは農政家・陶山訥庵である。伊奈郷久原村の原田三郎右衛門も訥庵と同様に甘藷の移植に熱心で、三郎右衛門は対馬と薩摩との間を何度も往復し、甘藷の研究に努めた。対馬では甘藷は米穀の備蓄の助けとなり親孝行になるということから、サツマイモを「孝行芋」とよんだ。1724 (享保 9)年、訥庵は「栗・孝行芋植立下知覚書」を書いて、豊崎・豆酘・伊奈・仁位・与良・三根・佐護・佐須の八郷へ配布した。「栗・孝行芋植立下知覚書」は栗の栽培を奨励しつつ、効用の大きい孝行芋の栽培を勧めたもので、内容は栽培法や食べ方、貯蓄法までに及んだ。そのため 1732(享保 17)年の飢饉の際、甘藷栽培が進められていた対馬の被害は少なかった。青木昆陽が著書『蕃薯考』で将軍徳川吉宗に甘藷を栽培して救荒食物とすべきだと論じたのは 1735(享保 20)年で、訥庵「栗・孝行芋植立下知覚書」の 10 年以上後のことである[4]。

伝統料理「ろくべえ」

発酵食品「せん」は、小さなサツマイモや傷の付いたサツマイモなど食用に適さないサツマイモを使って作る保存食である。「せん」はそのまま食べるのではなく、水で麺にして魚や鶏のだし汁とともに食べる。対馬ではこの麺料理を「ろくべえ」と呼び、郷土料理として親しまれてきた。現在は品種改良されたさつまいも使うなど、味のアレンジも様々である[5]。麺自体の見た目はツルツル（図 3)、食感はこんにゃくのようにプルプルで噛むとサツマイモの甘みが感じられた。

---

[3] 田中健夫『対外関係と文化交流』思文閣出版、1982 年、193-195 頁

[4] 田中健夫『対外関係と文化交流』思文閣出版、1982 年

[5] https://www.maff.go.jp/　農林水産省 HP「ろくべえ／六兵衛 長崎県」

図3 ろくべえ（「志まもと」にて/撮影：筆者）

朝鮮への影響

1764(宝暦 14)年使行で正使を務めた趙曮の『海槎日記』には対馬のサツマイモについて以下の記述が見られる。

「島で食べられる草根があって、名づけて甘藷あるいは孝子麻という。日本語では古貴為麻（コキイマ）である。形はあるいは山薬（ながいも）の如く、あるいは菁根（大根）の如く、瓜や芋の如く、その形は一様ではない。その葉は山薬の葉に似ているがそれよりもやや大きくて厚く、かすかに赤色を帯びている。その蔓は山薬の蔓よりも大きく、その味は山薬に比べて堅くて粘り気があり、半焼きの栗の味に似ている。生で食べても、焼いて食べても、煮て食べてもよい。

穀物と混ぜて粥にもなり、掻き混ぜて正果にもなり、あるいは餅を作ったり、飯に混ぜたりして、できないことはない。救荒の好材料というべきである。聞くところでは南京から日本に流入して日本の陸地や諸島に広まり、対馬島がもっとも盛んだという……。

昨年の初め佐須奈で甘藷を数斗求めて釜山に送って種をとらせたが、帰路のいま、またこれを求めて東萊府の校吏たちに授けたい。一行中の諸人もこれを得た者があるが、この物がよく成長してわが国に普及すれば、文益漸が綿を伝えたように（高麗末期に元から棉の種を伝えた)、どうして東国（朝鮮）の民を大いに助けるようにならないだろうか。東萊の種の蔓がよく蔓延すれば、済州島やその他の島に移植して栽培した方がよろしかろう[6]。」

この他にも『海槎日記』では、サツマイモの栽培法や貯蔵法を説明し、朝鮮に伝えた。『海槎日記』の中に見られる「古貴為麻(コキイマ)」は対馬の「孝行芋」が訛ったものであり、現在でも朝鮮語ではサツマイモは「고구마(コグマ)」という。サツマイモは釜山の影島など朝鮮半島南部の陸地や島で栽培され、朝鮮各地へと広がり救荒作物として大きな役割を果たした。

[6] 姜在彦『朝鮮通信使がみた日本』明石書店、2002 年、253-254 頁

第 2 章 対馬における朝鮮通信使の歴史

第 2 章では対馬と朝鮮通信使の歴史を探るため、まずは朝鮮通信使の概要に触れ、対馬藩主や対馬にとっての朝鮮通信使についての説明を加える。その後、現地調査で回った歴史的史跡や博物館について、史跡の概要と現地の様子を書する。

1. 朝鮮通信使とは

名称と目的

通信使とは「信を交わす」使節を意味する。江戸時代における朝鮮通信使は 1607 年から 1811 年までの約 200 年で 12 回に亘って来日した。名称について、第 3 回までは「回答兼刷還使」として主に豊臣秀吉の文禄・慶長の役（壬申・丁酉倭乱）で強制連行された被虜人の送還を求め、第 4 回以降は「通信使」として日本の将軍襲職祝賀や文化交流を行うなど、日本と朝鮮の友好関係の維持を担った。

朝鮮通信使の派遣と行程

通信使の派遣について、将軍が新しく就任すると幕府は老中や奉行職を来聘御用掛に任命し、同時に諸大名に対しても饗応や接待、領内の護衛などを命ずる。また、老中が対馬藩江戸留守居役を呼び出し、2 年後に江戸に通信使が到着するように朝鮮王朝に要請することを指示する。対馬藩は参判宛ての書状を持たせた大慶参判使を釜山に送り、将軍の就任を告げる。後日、ふたたび対馬藩から修聘参判使を送って、正式に通信使を要請し、朝鮮王朝にて通信使の編成が終了したことを知ると、通信使を迎えるための迎聘参判使を送る。通信使が対馬厳原に到着すると、藩主による歓迎の儀式と祝宴が開かれる。その後、幕府の命で厳原に駐在している以酊庵番僧と共に、藩主が藩士を率いて、通信使を護衛して江戸に出発する。沿道の諸藩には対馬藩から日程と使行人員が伝えられており、多くの藩主は国許へ戻り迎送の準備を行う。江戸城では、国書・礼単の奉呈、饗食、能楽の催し、通信使の中の馬上才による妙技の見物が行われる。寛永 13 年・寛永 20 年・明暦元年の通信使来聘の際には、この後東照宮参詣を求められ、日光を往復する。復路は往路をそのままたどる。往路も復路も諸藩は道路や客館の整備、宿泊の饗応、接待に全力を尽くした。幕府の歓迎方針を知ると、応対せざるを得なかったのである。対馬に着くと、対馬藩から送聘参判使が同行し、釜山入港で対馬藩の任務は終了する。参判使は釜山で東萊府使主催の歓迎宴や贈品を受けて帰国した。通信使については、王城にて国王が通信使を引見し、報告をして使行を終える。約 3,000km、8 ヶ月から 1 年を要する旅である[7]。

2. 対馬と朝鮮通信使

対馬にとっての朝鮮

[7] 三宅英利『近世の日本と朝鮮』講談社学術文庫、2006 年

対馬藩は「10 万石」を称していた。しかし対馬本島での生産は約 1 万石で、肥前国に 1 万 2800 石の飛び地を有していた。1818(文政元)年には肥前松浦郡、筑前怡土郡、下野国都賀・安蘇二郡から 2 万石を加増されたが、それまでは朝鮮貿易による購米と利益により 10 万石を維持しており、朝鮮との貿易は重要な収入源であった。対馬にとって朝鮮は藩の士民の生活を保つため、藩の存続に必要不可欠な外交相手だったのである[8]。

対馬藩主宗家

宗氏は鎌倉時代以来、対馬に定住し、朝鮮貿易の独占をはかって対馬全島を支配していた。しかし、藩成立期に文禄・慶長の役が起こったことで、それまで宗家が築き上げた朝鮮との関係も白紙になる。朝鮮との関係修復に努めた対馬藩初代藩主宗義智は、江戸幕府成立後の 1609(慶長 14)年、朝鮮との通行貿易規定である「己酉約条」を結ぶ[9]。その内容は対馬島主と朝鮮との個別的な通交関係を基調としており、対馬にとって有利な形で両国の国交が展開されるものであった[10]。対馬藩の藩経営基盤を作ったのは 3 代目藩主宗義真の時代である[11]。義真は検地を実施し、間高制を採用し、禄制を確立、また朝鮮貿易と銀山経営が最盛期を迎え、江戸幕府から 10 万石格を称することを認められた。

3. 朝鮮通信使関連史跡（現地調査）

万松院

1615(元和元)年、宗家 20 代宗義成が父義智の冥福を祈り「数青峰松音寺」を創立し、その後 1622(元和 8)年に義智の法号「万松院殿石翁宗虎」に因み、寺号を「万松院」に改めた。1635(寛永 12)年には慈性大僧正の勧めで、宗旨臨済から天台宗に改宗し、1647(正保 4)年に現在地である金石山麓に移転し、山号を鐘碧とした。1710(元禄 14)年・1727(享保 12)年の被災により大師堂・護摩堂・経蔵・宝蔵等が焼失、1871(明治 4)年の廃藩の影響で寺院が縮小され現在の形になった（図 4)。山門と仁王像は焼失から免れた対馬最古の建物と言われており、本堂は 1879(明治 12)年 10 月に第 33 代宗重正の寄進で建造されたものである[12]。

堂内には徳川歴代将軍の位牌だけでなく、朝鮮国王から対馬藩宗家に贈られたという三具足[13]もあり（図 5)、当時の朝鮮王朝と宗家の交流の深さを感じるものであった。132 段の石段を登ると歴代対馬藩主とその正妻を祀る墓所があり、その壮大さからは江

---

[8] 同上

[9] 田中健夫『対外関係と文化交流』思文閣出版、1982 年

[10] 田代和生『近世日朝通交貿易史の研究』創文社、1981 年

[11] 田中健夫『対外関係と文化交流』思文閣出版、1982 年

[12] 万松院パンフレット参照

[13] 仏前に供える「香炉」「花瓶」「燭台」を一揃いにして「三具足」という。

戸時代に日朝外交を担っていた対馬藩主宗家の影響力の大きさが感じられた。

図 4 万松院 山門（撮影：筆者）

図 5 三具足（撮影：筆者）

長寿院　雨森芳洲墓所

雨森芳洲は、実名を誠清といい、1668(寛文 8)年に近江国伊香郡雨森郷（現在の滋賀県）に医者の子として生まれた。18 歳の頃に江戸に出て木下順庵の門に入り、木下順庵の推挙により 22 歳で対馬藩に仕えることとなる。1702(元禄 15)年に初めて朝鮮半島に渡り、翌年には釜山の倭館に入り 3 年間在館し、朝鮮語を修得した。第 8 回朝鮮通信使(1711 年)と第 9 回朝鮮通信使(1719 年)来聘時には真文役として対馬－江戸間の往復を通信使に同行した[14]。その他にも将軍家宣薨去告訃や朝鮮国王即位陳賀の際に参判都船主として任務を果たしたり、公作米年限裁判として交渉の実務に携わったりと、朝鮮との外交職務を全うした[15]。1728(享保 13)年、芳洲が 61 歳の時に著し、藩主に提出した『交隣提醒』の中で、朝鮮観や外交のあるべき姿について 54 の項目に記している。「[……]実意と申事ニて、互ニ不レ欺レ争真実を以交リ候を誠信とは申候」という部分では、「相手国を欺かず、争わず、朝鮮国の風俗や習慣を理解し、違いを尊重した上で交流すること」の重要性を述べている[16]。この主張は現在の日韓友好や国際社会における外交にとっても必要不可欠である。芳洲は、1755(宝暦 5)年に厳原町日吉の別荘にて 88 歳で死去した。墓所は厳原町日吉の長寿院にあり、芳洲夫人、その子孫などと共に眠っている（図 6)。

現在は、日吉地区主催で雨森芳洲を顕彰する「芳洲会」が行われている[17]。また道路沿いには芳洲歌集の言葉が書かれた銘板が設置されている（図 7)。芳洲は現在も人々から尊敬され慕われながら、芳洲の考えや功績を受け継いでいこうとする取り組みが町全体で行われていると感じられた。

---

[14] 辛基秀・仲尾宏『図説・朝鮮通信使の旅』明石書店、2000 年

[15] 三宅英利『近世の日本と朝鮮』講談社学術文庫、2006 年

[16] 対馬朝鮮通信使歴史館パンフレット参照

[17] 「朝鮮通信使」説明看板参照

図 6 雨森芳洲の墓（撮影：筆者）

図 7 芳洲歌集の銘板（撮影：筆者）

国分寺（山門）

741(天平 13)年、聖武天皇の命で建造されたが、857(天安元)年に焼失し、その後1470 年前後(文明初年)に宗貞国が命じて山間に再興された。1665(寛文 5)年、対馬 3 代藩主宗義真の金石城拡張に伴い、日吉へと移された。1683(天和 3)年には朝鮮外交を担った日本の臨済宗寺院である以酊庵と地を交換して天道茂に移り、現在地に至る[18]。

朝鮮通信使来聘最後となった 1811(文化 8)年は易地聘礼であった。恒例を尊重する朝鮮王朝との約 20 年に及ぶ長い交渉を経て、通常の江戸城大広間ではなく、対馬の藩主邸で交聘が行われたのである。1807(文化 4)年、易地聘礼に伴い国分寺に朝鮮通信使をもてなすための客館と山門が建築された。これらは幕府からの下賜金による対馬藩の公費で建立され、客館は明治に解体された[19]。その後国分寺は焼失したが、八脚門の山門は当時のまま残っており（図 8)、国分寺の規模の大きさや歴史が感じられた。

図 8 国分寺 山門（撮影：筆者）

金石城跡・旧金石城庭園

[18] 平山棐『津島紀事』津島紀事刊行会、1917 年、71-72 頁

[19] 国分寺山門説明看板参照

1528(享禄元)年に起きた宗盛治による内紛で、当時居館であった今屋敷の「池の屋形」を焼失し、宗氏 14 代の宗盛賢(将盛)は金石の地に屋形を復して金石城を築城した。対馬 3 代藩主宗義真の治世には、城下に火災が続いたため、幕府の援助を受けながら大規模な町の整備を行い、金石城も 1665(寛文 5)年に 5 年かけて拡張した。金石城は、桟原城が居城となるまでの 150 年間宗家の居城として機能した。1811(文化 8)年の朝鮮通信使来島の際には、幕府上使小笠原大膳大夫の宿館として用いられ、各種施設を建築した。現在は金石城下部の約 3 分の 1 が復元整備（図 9)、1669(寛文 9)年屋形を拡張した際に建てられた櫓門は 1813(文化 10)年の火災で焼失し、文化 1817(文化 8)年に再建されたものの、1919(大正 8)年に解体された。1990(平成 2)に再建されたものが現在のものである[20]（図 10)。

藩主の館があった平地を進むと、旧金石城庭園に行き着く。旧金石城庭園は 1693(元禄 6)年に、藩士の中庭茂三が手掛けたとされていて、「心字池」と呼ばれ「殿様の池」として知られていた。現在は 8 年の範囲確認調査と 6 年の保存整備工事を経て、当時の姿が復元されている（図 11)。玉砂利を敷きつめた州浜状の汀線や斜面に施された巨大な景石は、対馬沿岸の風景を写している[21]。

図 9 金石城跡（撮影：筆者）

図 10 櫓門（撮影：筆者）

[20] 金石城説明看板参照

[21] 旧金石城庭園パンフレット参照

図 11 旧金石城庭園（撮影：筆者）

桟原城跡

1678(延宝 6)年、宗義真によって新築された。宗家は金石城から桟原城へと居城を移し、200 年にわたって桟原城を居城とした。「先君世世城ニ居住ス然モ家狭ク屋敷湿地ナル故朝鮮ノ使者接待ニヨカラザル故別埜ア桟原ニ営造ス則山ヲ平ラゲ谷ヲ埋メ干干木ヲ伐梯シテ家ヲ建」[22]とあり、金石城では狭く屋敷が湿地であるため朝鮮通信使接待には不適であったために山を開いて桟原城の造営にあたったことが分かる。

また、馬場筋通りという通りは、船着き場から桟原城までを結んでいて、桟原城築造に合わせて整備された。宗家の家臣たちの屋敷を両側に配置し朝鮮通信使行列の光景をより多くの領民に見せることで、対馬藩や藩主の権威や威容を内外に示そうとしたのである。金石城跡と比べて桟原城跡は厳原港からかなり遠く、馬場筋通りを何百人規模の通信使行列が列をなして歩く様子は大迫力だったと推測された。

現在は陸上自衛隊対馬派遣隊の駐屯地の中に位置しているため、内部を見ることはできなかったが、『津島日記』に記された当時の桟原城が描かれたという絵図には、城の左側に有明山が描かれており、「下駕」「下馬」「饗應所」「供屋」「番所」といった文字が確認された。

漂民屋跡

漂流民とは主に対馬独特の冬時期に吹く北北西の風により、対馬へと流されたり、逆に朝鮮半島へと流されたりした人のことである[23]。漂民屋は日本全国の沿岸に漂着した朝鮮漂流民を一時的に保護し、介抱・宿泊させた後、本国へと送還するための施設である。漂流民の介抱・送還自体は、文禄・慶長の役後の朝鮮国との国交が途絶えた際も、

---

[22] 平山棐『津島紀事』、津島紀事刊行会、1917 年、71-72 頁

[23] 永留史彦・上水流久彦・小島武博 編『対馬の交隣』交隣舎出版企画、2014 年

人道的措置として行われていた。両国とも漂流民だけは受け入れられていて、文禄・慶長の役後の信頼回復のための方法だったのだ。対馬では、1627(寛永 4)年から制度として漂流民の送還が行われるようになり、漁民・官人・商人など 9000 人以上が送還された[24]。

対馬藩は漂流民送還に関しての過程を幕府に報告することが義務付けられていた。朝鮮人が対馬に流れてきた場合は対馬藩で処理し、幕府に報告する。対馬以外であった場合は、長崎へ送り、取り調べ後に長崎奉行所から対馬藩へと渡され、対馬藩から漂流使をたてて釜山まで送還する。日本から朝鮮半島へと流れ着いた場合は、漂流地から釜山の倭館へ送られ、対馬藩へと引き渡される。その後出身地ごとに大坂・長崎の奉行所に渡され、各藩へと送還される。対馬藩も朝鮮側も、漂流民が送還されると、感謝の書契を送った[25]。漂民屋が朝鮮通信使と直接的な関連があるとは言い切れないが、日本と朝鮮が国交回復をし、友好関係を築く手助けになったと考えられる。

現在は漂民屋跡として、説明看板が設置されている。前方が海、両側を川の河口で囲まれた、周囲との関係を断ち切ったような独立した立地にあった。

対馬博物館

2022 年 4 月に開館した対馬博物館は金石城跡のすぐ近くに立地しており、「対馬を伝え、交わりを生み、つないでいく」をコンセプトに、対馬の歴史や自然、文化などに関する展示や各種プログラムが行われている[26]。1 階の平常展示エリアは古代・中世・近世・近現代と時代別に分かれており、各時代の説明映像と共に資料の展示がされていた。縄文時代の越高遺跡の朝鮮式の石囲い炉や弥生時代の楽浪系土器などを通して、古代から朝鮮半島との繋がりがあったことが窺えた。

江戸時代に朝鮮外交を担った島内での勢力を拡大する流れや宗家の内政、外交関連の古文書なども展示されている。宗氏は国交回復のため国書偽造・偽使など「偽」を用いた通交を行っていて、館内の宗氏紹介エリアには偽造印の再現スタンプコーナーが設けられている。国書偽造を行ったことから国交回復に努めた宗氏の強い意志を感じられた。

---

[24] 漂民屋跡説明看板参照

[25] 永留史彦・上水流久彦・小島武博 編『対馬の交隣』交隣舎出版企画、2014 年

[26] 対馬博物館パンフレット参照

第 3 章 現代に受け継がれる朝鮮通信使

第 3 章では、これまで見てきた朝鮮通信使の歴史が、対馬でどのように受け継がれてきたのか、またこれからどう受け継いでいくのかについて記す。

1. 朝鮮通信使の継承（現地調査）

対馬朝鮮通信使歴史館

今回の研究旅行では対馬博物館・対馬朝鮮通信使歴史館の館長である町田一仁氏にインタビューを行った。以下インタビューした内容を交えて記述する。

2017(平成 29)年 3 月 29 日朝鮮通信使対馬顕彰事業会が対馬市に対して「朝鮮通信使によるまちづくり」を申し出たことをきっかけに構想された。当初の歴史館建設計画では朝鮮通信使縁地連絡協議会理事長である松原征一氏が私財を投じての建設を予定していた[27]。博物館内に朝鮮通信使に特化したコーナーを設けようとしたが、宗家文書や対馬の歴史を中心に作っていて場所が足りなかったため朝鮮通信使の特設コーナーを作るのは難しかった。また対馬市が「朝鮮通信使によるまちづくり」を進めていく上で拠点施設として歴史館は必要不可欠なものとして松原氏と議論を重ね、公の施設として整備することとなった。旧長崎県病院企業団職員宿舎を約 3 億円かけて整備し、朝鮮通信使に特化した「対馬朝鮮通信使歴史館」を 2021 年 10 月末に開館した（図 12）（図 13）。人口約 3 万人の島に博物館と歴史館があるのは異例で、対馬にとっての朝鮮通信使の重要性が分かる。

「朝鮮通信使に学ぶ誠信の交流」をテーマとして、朝鮮通信使の歴史や対馬とのかかわり、雨森芳洲の誠信外交について実物資料・模型・複製により紹介している[28]。朝鮮通信使船の模型や馬上才図巻などの資料を通して、朝鮮通信使の歴史を確認・体験することができた。館長の町田仁一氏は「各地から訪れた人が自分の地域にも朝鮮通信使関連の地があることを発見でき、興味を持ってもらえるようにしている」と自らが撮影した「朝鮮通信使ゆかりの地」を情報検索コーナーで調べられる工夫を行っている。また、ガイダンス室では「朝鮮通信使～対馬の誠信交隣」の映像の視聴が可能だ。町田氏によると、「映像を見て感激して朝鮮通信使について勉強しようという人もいる」と言う。「対馬朝鮮通信使歴史館」は研究者のためだけでなく、市民などが朝鮮通信使について理解が深まる場所、また新たな観光資源として機能していた。

---

[27] 「対馬朝鮮通信使歴史館」パンフレット参照

[28] 同上

図 12 朝鮮通信使歴史館外観（撮影：筆者）

図 13「朝鮮通信使之碑」（撮影：筆者）

朝鮮通信使行列振興会

毎年 8 月に行われる対馬厳原港まつり[29]では、朝鮮通信使行列の再現が行われる。広島県呉市や山口県下関市などでも同様に朝鮮通信使行列の再現が行われているが、対馬はその先駆けとなった。今回の研究旅行では朝鮮通信使行列振興会 2 代目会長の庄野伸十郎氏に聞き取り調査を行った。

始まりは 1980(昭和 55)年、辛基秀氏の映画「江戸時代の朝鮮通信使」を観て感銘を受けた庄野晃三郎氏[30]が朝鮮通信使行列の再現を提案し、「李朝通信使行列振興会[31]」が発足されたことである。初代会長である庄野晃三郎氏は、釜山に渡り衣装など 120 名分を購入するなど準備を進め、同年 8 月から港まつりのメインとして通信使行列再現が実施、対馬市民や韓国の舞踊団が参加してきた（図 14、15）。1985(昭和 60)年に庄野晃三郎氏が急逝し、2 代目会長に息子である庄野伸十郎氏が就任した[32]。最初は、本業が疎かになり嫌々ながら従業員を参加させる「通信使行列」には猛反対で、2 年契約で会長を引き受けた。しかし、韓国に渡った際、父晃三郎氏のことを絶賛されたことで、父が行ってきたことの素晴らしさを感じたと言う。そこから 15 年間会長として通信使行列再現に尽力し、その後会長は有志で引き継がれ、現在は田﨑貢氏が 7 代目会長を務めている。2012(平成 23)年の仏像盗難事件が原因で 2013(平成 24)年再現行列は中止となるも、2014(平成 25)年再開が決定され、子ども通信使も開始された。2020(令和 2)年から引き続き今年もコロナウイルスの影響で朝鮮通信使行列の再現は中止となっていて、後

---

29 1959 年 8 月 14 日に「第 1 回厳原港まつり」が開催された。

30 大阪府の出身で、1953 年に対馬へと来島し、厳原で衣料品屋を営んでいた。

31 1989(平成元)年、「李朝通信使」を「朝鮮通信使」へと改名、組織名称を「李朝通信使行列振興会」から「朝鮮通信使行列振興会」へと変更した。

32 『平和の使者よ永遠に 朝鮮通信使行列振興会設立 40 周年誌』朝鮮通信使行列振興会、2021 年

継者問題、厳原以外の対馬全島の朝鮮通信使関連地での実施が今後の課題となっている。

対馬の「朝鮮通信使行列の再現」では、〈ただの仮装行列〉ではなく、〈対馬の歴史や江戸時代に日朝平和の架け橋となった人達の想いを再現する〉という意識を持ち、衣装作りや編成、歩き方や立ち方の指導まで時代考証に基づいた再現を行っている。同時に、大切な〈伝統〉を途切れさせないという想いが行列再現を行う上での力となっていた。また、2002(平成 14)年から釜山で行われている釜山文化財団主管の「朝鮮通信使祭り」では、対馬から武士団を連れて行列に参加しているなど新たな交流も生まれていた。「港まつり」を盛り上げるため、対馬の歴史を再現しようと始めたことが日韓交流としての面を持つようになっていったとの認識を得ることができた。

図 14、15 「李朝通信使」行列再現の写真（庄野家所蔵アルバムより/撮影：筆者）

長崎県対馬歴史研究センター

「長崎県対馬歴史研究センター」は、2020(令和 2)年に開設された対馬に関する歴史資料の調査研究や保存修復等を行うための施設で、対馬博物館の 2 階にある。対馬宗家が作成・管理した「対馬宗家文書」は、約 12 万点に及び国内外 7 ヶ所に分割保管されているが、そのうち約 8 万点を対馬歴史研究センターで保管している。朝鮮通信使の歴史を調査研究し、受け継いでいくための重要な役割を果たしていた。

資料閲覧は事前に予約を行い、希望の資料を指定した上で可能となる。当日は、受付を済ませて荷物をロッカーに預け、資料が置いてある別室に移動し、手を洗い資料閲覧を開始する。今回は①朝鮮通信使関係、②朝鮮通信使接待関係 、③対馬府中宗義智家譜、④書状案（積金宗家に献上の事)、⑤宗家事跡覚、⑥極秘密添書（宗家始祖に関する考察)、⑦対馬への外寇に関する宗家の事跡書上（文永・弘安・元中 6・応永 26・永正 7、「国家ニ尽スノ徴忠ニ依ル」)、⑧朝鮮国貿易盛衰之次第且対馬守身代出入之書付、⑨江戸御参上之時六月十二日対馬御立船即日より之日々記、⑩平戸藩における対馬壱岐替地風評書付写を閲覧した。宗家文庫の紙は非常にもろく繊細であり、ページをめくるなど一つ一つの取り扱いには緊張が伴った。

2. 対馬市の取り組み（現地調査）

対馬市役所

1986(昭和 61)年に旧 6 町が韓国釜山広域市影島区と姉妹縁組を結び、2005(平成 17)年には対馬市として再締結した。1995(平成 7)年に結成された NPO 法人「朝鮮通信使縁地連絡協議会」（以下、縁地連）の事務局が対馬市役所の観光交流商工課内にあり、対馬市役所文化交流課は縁地連の自治体会員となっている[33]。今回の研究旅行では文化交流課の小島繋樹氏に話を伺った。

朝鮮通信使関連商品の制作

対馬では、朝鮮通信使による町づくりの一環として、朝鮮通信使をモチーフとしたパッケージで包んださつまいもスイーツ商品の開発を行っている。土産物として購入してもらうことで、朝鮮通信使や対馬の歴史をより多くの人に知ってもらう狙いがある。さつまいもスイーツの製作は、対馬と韓国との繋がりの象徴として、市が事業として企画提案した。商品自体は完成しているものの、対馬の芋の生産などで採算が合わず、2022(令和 4)年 8 月の時点で商品販売には至っていないと言う。対馬では「孝行芋」としてさつまいもは親しまれていて、「日本観光物産館」や「観光情報ふれあい処つしま」などの土産屋ではいくつかさつまいも商品が見られたが（図 16)、その中でも「朝鮮通信使の歴史」がパッケージで示されたものには、「孝行芋すいーとぽてとたると」（株式会社たくみや[34]製造）があった（図 17)。

図 16 さつまいも関連商品（撮影：筆者）

図 17「孝行芋すいーとぽてとたると」（撮影：筆者）

対馬のこれから

観光については、2000(平成 12)年に対馬と釜山を結ぶ定期航路ができ、2011(平成 23)年 10 月にフェリー会社 3 社が対馬－釜山路線に参入し、運賃の価格競争が始まって

---

[33] https://www.city.tsushima.nagasaki.jp/「対馬市役所-文化交流課-国際交流」参照

[34] https://www.takumiya-corp.jp/「株式会社たくみや」石川県小松市矢田野町西 32-12 所在。土産菓子商品の企画・製造を行っている。

から急激に観光客が増え、観光客の 7〜8 割を韓国人が占めていたと言う。しかし隣国である韓国とは摩擦が起きやすく、観光産業への影響が著しい。対馬の韓国への依存を改善するため、対馬市では計画・政策を進めている。例えば世界的に流行した PS4 ゲーム「Ghost of Tsushima (ゴースト オブ ツシマ)」は、主人公が武士の道に反した冥人（暗殺者）として元軍へ逆襲するというストーリーで、「文永の役の際の対馬」から着想したと言う[35]。「Ghost of Tsushima」の映画化が決定していたり、ゲーム内に対馬の地名や風景が登場していたりと、新たな観光ターゲット獲得として期待されている。また観光振興計画では、中国・台湾・欧米に目を向け、寺泊まりの体験を企画している。寺泊まりは、修学旅行やゼミ合宿の宿泊先としても利用可能で、日本人観光客の増加も見込める。同時にアクセス困難な金田城にはタクシーで観光案内をするなど観光地としての整備も進めている。

[35] https://www.nagasaki-tabinet.com/static/ghost_of_tsushima/「Ghost of Tsushima」参照

おわりに

現地での文献収集としては、対馬博物館館長の町田氏より「当時の桟原城の絵図」や朝鮮通信使関連の論文といった朝鮮通信使の歴史や取り組みに関する資料だけでなく、『平和の使者よ永遠に 朝鮮通信使行列振興会設立 40 周年誌』という朝鮮通信使行列再現についての活動がまとめられた資料、対馬朝鮮通信使歴史館パンフレットを頂戴した。また、万松院や博物館でもパンフレットを手に入れられた。

考えていたよりも史跡同士が近くにあったことで時間に余裕が生まれ、当初の予定にはなかった「韓国展望所」まで足を伸ばすことができた。対馬と韓国の距離の近さを明に感じ、対馬が古代より朝鮮と交流を続けてきたことに思いを馳せた。また訳官使の遭難事故を追悼する殉難碑が 1999 年に建立されたが、これは雨森芳洲が記した「誠信交隣」と通ずるものだと考えられる。日韓交流の礎はこうした「誠信交隣」があってこそ築かれたと思案した。

「厳原港まつり」で「朝鮮通信使行列再現」の見学やインタビューを計画していたが、直前で新型コロナウイルスの再流行により行列再現が中止となってしまった。毎年 8 月に行われる「厳原港まつり」で今後「朝鮮通信使行列再現」の開催が決定したら、再度対馬に渡り、行列再現を直接見て、参加者にも話を伺いたい。

対馬の街では、韓国語表記の看板や説明書、バス行き先の韓国語表示など、韓国語を目にすることが多かった。これらにより、対馬が「国境の島」であること、コロナ禍までは韓国人観光客が多数訪れていたことが身を持って感じられた。朝鮮通信使関連商品とは別に、車体に朝鮮通信使が描かれたバスも見受けられ、対馬市民や観光客に朝鮮通信使の歴史や対馬の取り組みを広げる役割を担っているようだ。

研究旅行前までは、江戸時代から続く日韓交流の証としてのサツマイモ関連商品について焦点を当てて卒業論文執筆を進めようと考えていた。しかし、今回の研究旅行では、対馬での朝鮮通信使の歴史はもちろん、朝鮮通信使を受け継いでいこうとする意志を最も感じられたように思う。これを契機として、朝鮮通信使行列再現などにも幅を広げ、日韓交流の実態について執筆を行っていきたい。

【参考文献】
○田代和生『近世日朝通交貿易史の研究』創文社、1981 年
○田中健夫『対外関係と文化交流』思文閣出版、1982 年
○辛基秀・仲尾宏『図説・朝鮮通信使の旅』明石書店、2000 年
○姜在彦『朝鮮通信使がみた日本』明石書店、2002 年
○三宅英利『近世の日本と朝鮮』講談社学術文庫、2006 年
○永留史彦・上水流久彦・小島武博 編『対馬の交隣』交隣舎出版企画、2014 年
○『平和の使者よ永遠に 朝鮮通信使行列振興会設立 40 周年誌』朝鮮通信使行列振興会、2021 年

【参考資料】
○対馬朝鮮通信使歴史館パンフレット
○万松院パンフレット
○対馬博物館パンフレット

【参考 URL】
○https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/956888
「国立国会図書館デジタルコレクション[平山棐『津島紀事』津島紀事刊行会、1917 年]」（最終アクセス日時 2022/09/20）
○https://www.nagasaki-tabinet.com/static/ghost_of_tsushima/
「Ghost of Tsushima」（最終アクセス日時 2022/09/20）
○https://www.city.tsushima.nagasaki.jp/
「対馬市役所 - 文化交流課 - 国際交流」（最終アクセス日時 2022/09/20）
○http://www.takumiya-corp.jp/
「株式会社たくみや」（最終アクセス日時 2022/09/20）
○https://www.maff.go.jp/
「農林水産省 HP - ろくべえ／六兵衛 長崎県」（最終アクセス 2022/09/20）